

文化を教えるということ
—福岡女学院大学における講義実践を手がかりとして—
A Study on Teaching Culture
Focusing on A lecture practice in Fukuoka Jogakuin university

大 田 千波留

福岡女学院大学 教職支援センター
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

文化を教えるということ —福岡女学院大学における講義実践を手がかりとして—

A Study on Teaching Culture Focusing on A lecture practice in Fukuoka Jogakuin university

大 田 千波留

はじめに

本稿では、福岡女学院大学において実施した「文化人類学入門」の講義実践をもとに、文化を教えることの意義について考えてみたい。

筆者は、2007年度から福岡女学院短期大学部英語学科で「比較文化論」（カリキュラム改編で2016年度から「比較文化」）の講義を担当し、2019年度から大学部国際キャリア学科や現代文化学科等で「文化人類学入門」「多文化共生論」を担当している。福岡女学院で15年以上、文化教育に携わり、多くの学生の言説に触れてきた経験を通して、大学における文化教育の必要性とその難しさについて考察する。

I 本研究の位置づけ

グローバルな社会化に伴ってさまざまなところで「多様性」や「多文化共生」が叫ばれている今日、「比較文化論」や「多文化共生論」にも多角的な視点での教育が不可欠なものとなりつつある。われわれの周りを見渡すと、ソーシャル・メディア（SNS）に代表される地球規模の連絡網を介した人やモノなどの越境と価値観の混交が著しく進展し、スマホやパソコンを開けば、瞬時に世界とつながる現代、大学で文化を教える意義は何なのだろうか。本稿では筆者が実践している講義を事例として、大学で「文化を比較の視点でとらえる」講義の必要性を考えてみたい。

そもそも「比較」することとはどのようなことを指しているのだろうか。『大辞泉』には「二つ以上のものを互いにくらべ合わせること¹」とある。また、『日本国語大辞典』には「二つ以上のものを互いに比べ合わせて、それらの間の類似点、相違点、一般法則などを考察すること²」とある。しかし、文化を比較することは、2つあるいはそれ以上の文化現象をただ並べてみれば、それで理解できるといったような、単純なものではない。例えば、アメリカと日本の文化を比較しなさいと言われても、アメリカと日本の、何を、どのように比較するといいいのか皆目見当がつかないだろう³。

では、「文化を比較する」とはどういうことを意味するのだろうか。日本比較文化学会のホームページには「諸文化の比較研究及び比較研究の方法論に基づく諸学問分野の研究を促進し、多文化間の理解と交流及び学際的な学術の発展と交流に資する⁴⁾」とある。ここから見えることは、個別の文化を精密に研究しても、その特性や特質を理解することは難しい。他の文化と比較したり対照したりすることによってはじめてその差が顕在化し、理解へ進むことが可能になるということだろう。筆者の講義では比較をするという行動を、無意識的にではなく、自覚的に行うことを目指している。平野が述べるように「人間は比較操作をおこなうことなしに思惟することはできない。あるいは、思惟すれば、必ず何らかの比較をおこなわざるをえない⁵⁾」のである。例えば、ハンカチの使い方を、Aの人々とBの人々の間で比較する場合、どうすればよいだろうか。無自覚的な比較を行う場合、おそらく、Aの人々の日常世界でのハンカチの使用方法から考え、Bの人々の日常世界は考慮せず、Aの人々の使用方法からBの人々のハンカチの使用方法を認識しようとするかもしれない。しかし、このようなやり方は筆者の考える「比較の視点」ではない。比較をするというのは前述したように、類似点、相違点、一般法則などの探求である。従って、次のような方法が自覚的比較のやり方であると言える。つまり、ハンカチという小さな布切れに対する考え方の違いを、社会的背景に関する情報から読み解いてみるのである。Aの人々を日本、Bの人々を中国として考えてみよう。日本でハンカチは「日用品」であり、日常的に持っていることが多い。1980年代はバブル経済を背景にブランドのハンカチを持つことが流行した。バブル経済崩壊後、2000年代ではガーゼ地やタオル地のハンカチに変化し、より実用的なものへ変化してきた。一方、中国でハンカチは、ステイタスと関連した「贅沢品」であったものが時代と共に衰退してきた。1920～30年代、上海などの都市部では上流階級の女性がシルクのハンカチをもち、その後の1950年代では国力の低下や経済の低迷を背景にハンカチは衰退していった。現代ではハンカチをもつことはほとんどなく、手や口を拭くのに一般的にペーパータオルが使用されている。日本の和柄のハンカチが中国で「土産」として購入をされているが、それは日本のような日用品として使用されているわけではない⁶⁾。ハンカチという物を「社会的背景」という基準にそって比較することで、それぞれの文化がもつ意図が見えてくる。

上述のような視点をふまえ、以下では、筆者の行った講義内容について検証し、不完全ながらも、「文化を比較の視点でとらえる」方法の一つの型を示すものである。

Ⅱ 「文化人類学入門」の講義内容

ここでは2023年度前期開講の「文化人類学入門」のシラバスを以下に示す⁷⁾。2023年度前期、この「文化人類学入門」の履修者は102名であった。

教育目標

人類の文化や生活様式の多様性と普遍性を理解し、文化人類学の視点を身につける。

到達目標

- ①文化人類学とは何かを分かること。
- ②われわれの常識や価値観を改めて見直すこと。世界を「比較」という視点で観察して自己と他者の相異について理解することができる。
- ③文化人類学の基礎的で主要な考え方や概念を理解すること。

講義概要

文化人類学とはフィールドワークから得られる知見に基づいて、さまざまな人間現象をとらえる方法的学問である。本講義では世界のいろいろな現象や伝統、文化を参照し、それらを比較し、これまでなされてきた分析や解釈の検証を通して、われわれの常識や価値観を改めて見直すことを目的としている。われわれと異なったロジックで生きる人々の文化を、われわれに理解可能な言葉で説明するというのではなく、異文化を生きている人々の日々の生活や思いとの出会いを通して、われわれが生きている「あたりまえ」の現実を別の視点から見直し、生の多様な可能性を見出すための学びである。

この講義を通じて、人類の文化や生活様式の多様性と普遍性を理解し、文化人類学の視点を身につけることがテーマとなる。文化人類学の基礎的で主要な考え方や概念を、異文化からの事例だけではなく、われわれが日常的によく知る事例を通して学んでいく。文化人類学の基本的なテーマや理論を理解することが目的になるので、文化人類学の成り立ちや歴史、方法論には始まり、具体的な人類学のトピックを通して、われわれが生きる社会やその現実を別の視点から見直す道具として使いこなせるように考えていく。文化人類学的手法を用いて、人の営み、世界の見方、社会の在り方などわれわれの身近な事象が、どのような文化的、社会的背景によって構成されているか想像する力をつけ、自己の基準を他者に当てはめることの危うさへの視点を培う。

取り上げるトピックは、文化人類学の歴史、フィールドワークの方法、生業と人々、未開と文明という視点、社会システムとしての婚姻、家族とよそ者、死のとらえ方とその儀礼、贈与と交換—贈りもののやりとり、宗教と文化、呪術と民間信仰、民族観などである。

評価は期末の論述課題（研究レポート）、毎回の授業後の課題提出、授業への積極的参加度によって行う。論述課題の書き方や取り組み方については講義内で実施する。

Ⅲ 「文化人類学入門」の問題点と対応

「文化人類学入門」だけではなく、文化を取り扱う講義は卒業論文作成のためのゼミ以外では、集団で行われることが多く、前もって想定される主な問題点は以下のものであった。

①教師の関与の度合い

学生の講義に対する主体性をどのように引き出すか。単位取得を目的とした履修学生や、文化に関心はあるが、教師が提示する内容と関心が合わないと感じる学生に対し、主体的な学びに繋げるにはどうすればよいか。文化人類学という学問を逸脱せず、どのように講義内容を設定するのか。

②学生の理解力

文化人類学を専門としない学生に、講義内容に関する知識を得る術を知り、自分の意見を持ち、その意見を他者に分かるように表現できるか。

③自文化、他文化に関する知識のレベル

日本文化など各学生の自文化に対する知識が乏しいことが多いが、それをどのように底上げするか。その上で世界に目を向け、自文化と対照しながら他文化を考え、理解することに繋げることができるか。

④講義における内容項目の選定

単なる文化紹介にならないようにしながら、学生が関心を持っているテーマとどのようにすり合わせて選定するか。また、文化をとらえようとするとき、ディスカッションやグループワークを活用すると、より効果的な理解につながるが、履修者が多い場合、その活用が難しく、効果的な理解をどのように進めるのか。

⑤評価方法

文化を題材にした講義で、その理解度や習熟度をどのように測るか。

上記の問題に関して、筆者の講義では次のように行うことにした。

①に関しては、講義形式であるため教師主導型ではあるが、テーマ設定を行い、講義後すぐに学生に考えたことや学んだこと、疑問に思ったことなどを自由に記述してもらう。そして、次の講義内でフォローアップしながら、学生の関心や要望に即して臨機応変に対応する。

②に関しては、講義内容に関する知識を得る術として、参考文献を提示する。時には紹介した書籍や論文を講義内で輪読をする。自主的に学ぶ方法を提示することで、学生が何をすればよいか見えてくると考えたからである。

③④に関しては、次の授業のための文献や文化紹介を予備知識として与え、自分の見解を明

らかにさせておく。

⑤に関しては、毎回、講義に関するコメント用紙を提出させる。身近な習俗に関して各自が調査をし、それを小レポートにまとめる。期末の研究レポートを提出させることにする。

Ⅳ 事例研究

上記の問題点や対応をより具体的に検証するために、「文化人類学入門」で実際に実施した講義内容を2つ取り上げて、考察を進める。

(1)第8回・第9回「死のとりえ方とその儀礼—『通過儀礼』と境界性理論」

ここでは「死のとりえ方とその儀礼」という講義を例に、「文化を比較の視点でとらえる」方法の一つの型を考えてみたい。死の儀礼に関する講義は文化を比較する上で避けることのできないテーマの一つであると言えよう。人間は必ず死を迎えるが、そのとりえ方や儀礼は文化ごとに異なっており、多種多様な習俗がそこには見られる。筆者は単なる葬式の紹介にとどまらないように、また、学術的にとらえられるように次のような講義を実施した。

「死のとりえ方とその儀礼」という講義は2回に分け、一回目は、日本における死の儀礼を取り上げ、湯灌という儀礼と不浄性の概念、骨揚げという儀礼と死の確認、祖先崇拝の3点から考えた。日本の儀礼は全体を理解することより、細部の儀礼を見ることで身近な葬式への一歩進んだ理解を目的とした。二回目は、中国貴州省瑶麓ヤオ族の死の儀礼と、インドネシア、マレーシア、ブルネイに跨るボルネオ島のイバンの死の儀礼を取り上げ、通過儀礼としての側面、死のとりえ方、死者と生者の境界の3点から考えた。海外の儀礼はそもそも知らないことが多いため、それぞれの地域の成り立ち、儀礼の全体像をおさえ、日本の死の儀礼と比較ができるように心がけた。アジアの3つの事例をもとに、それぞれの文化が死をどのように描き出すか。「死者」をどのように扱うか。「生者」は、誰が、いつ、何を、どのように振る舞えばよいのか、という視点から考察した。死の儀礼はそのさまざまな場面で、そこに参加する人々に「境界線」をつくり出す役割を果たし、その境界線はそれぞれの集団や社会に属する人々の暗黙の合意によってつくられたものであることを提示した。死の儀礼という事象を「境界」という基準にそって比較することで、葬式の式次第だけを知るだけではなく、死の儀礼を文化の視点でとらえなおすことを目指した。

学生の反応はさまざまであったが、その中で多かったものを紹介しよう。一つめは、「死に向きあったことが少ないため、実感がないトピックであるが、社会で生きていくためには理解をしておく必要がある。今後も調べてみたい」というものである。二つめは、「家族の〇〇が亡くなったときに葬式に参列したが、初めてあるいは数回目であり、知らないことが多く、続けて調べて

みたい」というものである。前出の前もって想定される主な問題点と対応とこれらの言説を対応させてみたい。①教師の関与の度合いは、学生の講義に対する主体性を引き出すことに成功していると考えられる。上記の2つの意見を見ると、死の儀礼は、学生自身が参加することは多くはないが、ライフステージのどこかで経験する儀礼であるにもかかわらず、知識がないことが多い。学生の身近で、比較的見たり聞いたりしやすい死の儀礼な例を取り上げることで、学生はより関心を抱きやすくなり、主体的な学びに繋がったと言えよう。②学生の理解力は、文化人類学的視点で、死に関する儀礼を比較し、自分で調べることで、死の儀礼が地域性を持っていることや儀礼にさまざまな意味があることなどに関心を持つことに繋がった。③自文化、他文化に関する知識のレベルは、日本文化など各学生の自文化に対する知識を高めることに寄与でき、他文化への関心を深めることにも繋がった。④講義における内容項目の選定は、学生が関心を持つテーマ選定にはなっているが、履修者が多く、ディスカッションを実施するまでには至らなかった。⑤評価方法は、死の儀礼について学生自身で家族に聞き取り調査を実施してもらい、講義内容をより深め、小レポートにまとめてもらった。この講義では、死の儀礼を「境界性」という基準で比較しとらえる視点をおおむね提示することができた。前もって挙げた問題点に対応できたが、すべての学生でその成果が出ているわけではないため、その点は考慮すべきである。

(2)第13回・第14回「民族観—民族が創られるとき」

ここでは「民族観」という講義を例に、「文化を比較の視点でとらえる」方法の一つの型を考えてみたい。「民族」に関する講義は、われわれが多文化共生を達成するためには避けることのできないテーマの一つであると言えよう。日本社会では「民族」をとらえる瞬間はあまり多くない。どちらかと言えば、われわれも民族の一つとしてとらえることができるにも関わらず、日本人は「民族」と関わりがないと考えていることが多い。筆者は世界の人々を、特に後進国の人々だけを「民族」という枠組みでとらえる視点に疑問を呈し、人々の日常生活、政治性、考え方などの視点から民族と「民族」概念を学術的にとらえられるように次のような講義を実施した。

「民族」に関する講義は2回に分け、一回目は、日本における民族の様相を取り上げ、日本人と考える理由、日本人の中の多様性、大和民族という言葉から考える日本人、の3点から考えた。日本人という線引きが法学、歴史学、人類学などの学問領域でずれていること、われわれが無意識に日本人と非日本人という枠組みで日本人を分けていることなどに学生が気が付くような内容とした。二回目は、日本人がもつ民族観形成の歴史と、「民族」という用語とその解釈、「民族」は創られた政治的歴史的産物であること、の3点から考えた。「民族」が創られた概念であることをとらえるため、一回目の講義で扱った具体的な人々と概念を、自覚的に何度も行き来し、学生が自問自答をしつつ、考察できるように心がけた。日本における「民族」の様相を紐解けば、

「単一民族観」という思想とその思想によって創り出された総体としてわれわれが見えてくる。単一的に見える日本人の内実は、県民という言葉に代表されるような人々、在日コリアンなど日本の植民地であった朝鮮・台湾出身の人々の子孫、沖縄の人々、先住民族のアイヌ民族の人々、外国人労働者や移民といった多様性に満ちている。にもかかわらず、大きな枠組としての「日本人」という単一的な見方で自らをとらえている。単一的にとらえていると言いながら、実際は優越や先進という意識、排他性を付着させながら、「われわれ」対「われわれでない人びと」という二項対立で考えてしまっているのではないか。「日本人」という枠組みもまた概念であり、そもそも原初的に変化なく存在するものではなく、流動的に創られてきたものである。この講義は文化人類学の最後に配置し、目に見えるが、見えにくい「民族」を比較の視点でとらえる訓練として実施した。

学生の反応はさまざまであったが、その中で多かったものを紹介しよう。一つめは、「われわれも民族であったことに驚いた」というものである。二つめは、「民族を分けずに大きな枠組みのままとらえた方が差別につながらないのではないか」というもの、三つめは、「民族を分けずに大きな枠組みのままとらえることで、見えなくなっている人々がいることに気が付いた。知ろうとする姿勢が重要である」というものである。前出の前もって想定される主な問題点と対応とこれらの言説を対応させて考えてみたい。①教師の関与の度合いは、学生の講義に対する主体性を引き出すことに成功していると考えられる。上記の3つの意見は一見、相反したもののようであるが、よく見ると同様のことを述べている。「民族」をとらえることは難しいことであり、日常では関心を抱きにくい内容である。しかし、学生は自らの関心や意見を展開し、主体的に考えるようになり、次第に比較の視点でとらえることができるようになっていく。②学生の理解力は、文化人類学的視点で民族をとらえ、自分で調べることへ学びを深めることに繋がった。難しい内容こそ、講義内で取り扱うことで理解しやすくなり、考えることの重要性を感じている。③自文化、他文化に関する知識のレベルは、日本の民族や民族観を中心に知識を高めることに寄与でき、自分で考えることの楽しさを感じ、世界を見渡す視点を深めることに繋がった。④講義における内容項目の選定は、学生が関心を持つやすいテーマ選定ではなく、多少難しい内容となったが、履修者自身は繰り返し考えることで自覚的に思考する意味を理解したようであった。ディスカッションを実施できればより理解が深まったと考えられる。⑤評価方法は、民族について学生自身で関心のある民族について調べてもらい、講義内容をより深め、小レポートにまとめてもらった。この講義では、日本人を「民族」という基準で比較しとらえる視点をおおむね提示することができた。前もって挙げた問題点に対応できたが、すべての学生でその成果が出ているわけではないため、その点は考慮すべきである。

V 文化を教えること

上記ではこれまでの講義実践を分析すると、大学において文化を教えることには一定の成果が見られた。ここではそのまとめとして、大学において文化を教える必要性和その難しさについて考察する。

文化を知り、学ぶにはその対象となる場所へ行くことが手っ取り早い方法だと言われる。海外などの現地に行って学べば学びは深くなるはずである、と。留学のように文化を学ぶ絶好の機会を否定するものではないが、どのような体験が文化を学ぶことに成功したと言えるのか定義するのは難しいだろう。例えば、本人が「素晴らしい経験をした」と報告しても、新たな環境について多くを学んだり、深いレベルで体験したりしたとは限らない。筆者の2人の友人について書いてみよう。一人は渡米して13年になり、アメリカでの生活を大いに気に入っているが、英語は減多に話さず、アメリカ人の友人も少なく、日本人コミュニティの中に閉じこもって満足している。しかし、アメリカに対して非常に肯定的である。もう一人は、渡米して15年になるが、アメリカでの生活に不満を持っている。英語が堪能で、大学で博士号も取得しているが、アメリカに対して非常に否定的で、自文化中心主義の判断をしている。この2人の友人の事例から、現地語が堪能で、その国に関して学んだり、友人を作ったりする能力だけで、現地の文化を知り、理解していると言えないことが見て取れるだろう。現地に滞在していても困難である「文化を学ぶ」ことを、大学の講義で実践することは可能なのだろうか。筆者はその入口に立つことは可能であると考えている。誰もが現地に行って文化を学べるわけではないし、現地に行きたいわけでもない。そこで高等教育機関である大学において文化を教える必要性が浮上すると筆者は考えている。

ショールズは「異文化教育の分野では、授業での教育目標と異文化を学ぶ上での望ましい成果が、明確に分けられていない場合は多い。外国で成功体験をすると、ある種の抽象的な資質を伸ばす結果となるように考えられている。よく言われる資質は「文化の気づき (cultural awareness)」である。このような資質は、目標がどのように達成されるのかに関する説明と同様に、抽象的なことが多い⁸⁾と述べている。「文化の気づき」をすることは現地に滞在していても抽象度の高い資質であるのに、現地に滞在していない学生に異文化教育で述べられているこの資質を問うことはあまり有意義な手法ではないだろう。ショールズの言う「文化の気づき」へ繋げるためにも、大学の講義では「知ること」から始め、知った文化を「比較の視点でとらえる」訓練が必要になると考えられる。文化人類学のような文化を研究対象とした学問はその入口にある講義であると言える。文化人類学や比較文化論という科目は大学に入学してはじめて学ぶことができる学問領域である。文化人類学者は研究対象となる事象が実際に生じている場所に赴き、現地の中に入っていつとも暮らしながら調査研究している。筆者は、自分の経験やさまざまな文化現象を学問的に還元することが文化を教えることであると考えている。言語を学ぶ時、文法や言

語構造の理解が重要視され、その言語話者のもつ表面的な「文化」に向き合うことはあっても、文化的な成立背景を深く学ぶ機会は少ないだろう。その齟齬を埋めるために、言語が成り立つ背景にある「文化とは何か」、「自己を理解し、その上で他者と向き合うこと」を考え、言葉の中に見え隠れするものをつかむ必要を強く感じている。われわれと異なったロジックで生きる人々の文化が、どのような文脈によって構成されているのかを知り、われわれが生きているあたりまえの現実を別の視点から見直すという思考の訓練が大学における文化を教えることであると言えるだろう。

そして、大学で文化を教える実践は、学生が学びへの積極的な姿勢をもち、グローバルな視点で国際社会にはばたく視点の育成につながるはずである。現代の国際社会においては、グローバルな視点とローカルな視点を併せ持ち、異文化の理解と同時に、自文化を理解し発信する力が求められている。多文化共生やグローバリズムといった視点と、自文化発信やローカルな視点から文化理解が必要である。筆者の講義では、例えば、日本の伝統文化について学び、それを論理的に考え、自分の住む地域や文化の諸問題に対して積極的に関心を持ち続け、現代社会に貢献するために何ができるのかを考えている。英語圏の国々のみならず、諸外国の多様な文化や社会について理解を深める必要性を学生と共に考え、文化の多様性をとらえる意図や重要性を理解してもらうことも心がけている。大学において文化を教える意義はここにあると言える。

しかし、文化を教えることは上述のように実践すれば成功するものでもない。「文化人類学入門」の講義でも学生からよく聞かれた言説がある。例えば、「ガチ中華（料理）は好きだけど、中国人は騒がしいので嫌い」や「文化には違いがあるから、そもそも理解できるわけではない」という言説である。文化を「知る」ことは比較的容易にできることであるが、講義内でその先の理解へ進むとき、十人十色の反応を喚起する。このような反応はショールズの言葉を借りれば、「抵抗」「受容」「適応」⁹である。講義では実際に文化を体験しているわけではないため、「抵抗」と「受容」だけが反応として現れる¹⁰。学生は、ある現象や要素に対しては抵抗するが、別の現象は受容する場合がある。イメージが先行することで、学生が関心を寄せている文化では、無自覚に「受容」を、関心の薄いあるいは好まない文化では、無自覚に「抵抗」を示す場合も多々見られる。ある現象に対してこの学生自身がもつ自文化中心的な判断を一概に悪いと批判することはできない。ここで必要なことは、学生自身がその自文化中心的な判断を自分が持っているかもしれないことに気づくことである。「抵抗」は、否定的な反応が現象そのものではなく自身がもつ期待に部分的に起因していると感じにくいことに関係している¹¹のである。「中国人は騒がしい」とする見方は、日本人は騒がしくしない、外では静かにするのが一般的であるという期待から導き出されている。このとき、「何故、中国人は騒がしいのか」という問いを立てても考えは深まらず、抵抗を示すだけになりがちである。「中国人と日本人の言語観の差異や人との距離感の相

違がどのようなものであるか」という基準にそって比較し、考えることを提示する必要がある。

「文化を教えること」は単なる文化紹介となつてはならず、どのように考えればよいかを提示することに難しさがある。文化相対主義的視点の「みんな違ってみんないい」という見方だけで文化をとらえようとする、結局知ることさえもできなくなる可能性がある。「みんな違ってみんないいが、その違いは何で、どのように違うのか」へ視点を繋げ、学生が考える力を育む必要性があるだろう。大学で「文化を比較の視点で教える」意義はここにあると考える。

おわりに

本稿では、福岡女学院大学での講義実践をふまえ、文化を教えることの意義について考えてきた。文化を教える今後の構え方を考えていく上で、従来の文化教育の妥当性と問題点をよく省みながら「文化を比較の視点でとらえる」ことに関する吟味・考察を行っていく必要があるだろう。インターネットを利用しながら感知できるさまざまな情報や、街中に点在するグローバル雑貨店で目にしたり購入したりできるさまざまな商品に沿って、断片的な価値観をかき集めながら思い思いに文化を寄せ集めていく現代の多くの学生に、これまでに編み出された一連の文化人類学的視点をを用いながら比較吟味し、自己と他者と共に地域社会に貢献し得る人材へと転化していく工夫こそ、「大学で文化を教えること」に求められる主要業務のひとつであろう。こうした意味合いにおいて、人間の文化がいかに多様性に満ちているか、文化がいかにさまざまに解釈し得るか、文化を比較することでいかに多彩な展開へつながらるかを問うていくことが大学教育に還元できる方法であろう。

最後に反省しておきたい点がひとつある。本稿では「文化を比較の視点でとらえること」に焦点をあて、筆者の実践と構想を提示するだけにとどまっている。今後は、「文化とは何か」「文化のとらえ方」にまつわる諸研究の検討も必要であろう。時間と字数制限に阻まれ、この点については詳しい論の展開を図れなかったことをこの場を借りてお詫びしておきたい。

¹ 『大辞泉』第二版、小学館、2012年。

² 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2003年。

³ 本来、「文化とは何か」という定義づけをすべきであるが、紙面の都合上、その議論は別稿に譲る。

⁴ 日本比較文化学会ホームページ hikakubunka.jp 2024年2月20日閲覧。

⁵ 平野幸仁 b、「比較文化論序説(2)」、『横浜国立大学人文紀要』41、1994年、p. 61-78、引用 p. 61。

⁶ ハンカチの使用に関する日中比較は、筆者が2005年中国浙江省寧波市での長期調査で得た内容から着想を得ている。

- ⁷ 比較の視点を示す上で本来であれば「比較文化論」の講義を取り上げるべきであろうが、2023年度、短期大学部で閉講になったため、「文化人類学入門」を例として考える。
- ⁸ ショールズ、ジョセフ、『深層文化 異文化理解の真の課題とは何か』、鳥飼玖美子監訳、大修館書店、2013年、引用 p. 94-95。
- ⁹ 同上 ショールズ、引用 p. 144。
- ¹⁰ ショールズは「異文化に接するとき、大半の人々は、ある要素には抵抗するが、別の要素は受容して適応するというように、この3つのいずれの反応も示す場合がほとんどである」と述べている。同上 ショールズ、引用 p. 144。異文化の現場に身を置かずに学ぶ講義ではショールズの言う「適応」の状態は発現しないと言える。
- ¹¹ 同上 ショールズ、引用 p. 148。

参考文献

- 青柳寛、「「比較文化論」における文化の捉え方に関する一考察」、『国際学研究』、明治学院大学紀要第62号、2023年、p. 11-21。
- 平野幸仁 a、「比較文化論序説(1)」、『横浜国立大学人文紀要』 40、1993年、p. 192-206。
- 平野幸仁 b、「比較文化論序説(2)」、『横浜国立大学人文紀要』 41、1994年、p. 61-78
- 栗原優、「学術的研究分野『比較文化学』—「比較文化」から『比較文化学』の確立へ向けて—」、『比較文化論纂』、開文社出版、1998年、p. 32-46。
- 松平誠、「比較文化論序説」、『比較文化論—異文化の理解—』、世界思想社、1995年、p. 2-25。
- ショールズ、ジョセフ『深層文化 異文化理解の真の課題とは何か』、鳥飼玖美子監訳、大修館書店、2013年。

